

178 フランス柔道の父—川石造酒之助（2023 年 7 月 20 日）

日本が発祥のスポーツでオリンピック競技として定着したものと言えば、柔道と競輪が挙げられます。フランスは柔道大国として知られ、2021 年に開催された東京 2020 オリンピック競技大会では、この大会でオリンピック種目として採用された男女混合団体戦で、フランスが初の王者となりました（写真右は、フランスのクラリス・アグベニュー選手が東京オリンピック大会で着用した柔道着。2021 年にパリにあるケ・ブランリ美術館で開催された「アジアの武道展」で展示された。アグベニュー選手は、男女混合団体戦と女子 63 キロ級で優勝し、2つの金メダルを獲得した。）。



La statue de cire de Teddy RINER, détenteur d'un record de dix titres de champion du monde, et celui de Clarisse AGBEGNENOU, exposés au musée Grévin, Paris
世界選手権で 10 回優勝したフランスのテディ・リネール選手とアグベニュー選手の蠟人形（パリ、グレヴァン美術館）

私はフランスに来て、全国各地に柔道場や柔道クラブがあることに驚きました。日本とフランスのそれぞれの柔道連盟の登録選手数を比較すると、日本は減少の一途をたどって 2021 年は約 12 万 2000 人であった一方、フランスは、新型コロナウイルスの感染拡大で打撃を受けた後でも 51 万人もの登録選手を数え、世界第 2 位です。この数字を見るだけでも、フランスが柔道大国である理由が分かります。かつて柔道は日本のお家芸だと言われていましたが、国際大会でフランス人柔道家に対して日本人選手に勝てない試合が増えてくるのを見て、フランスの強さと、もはや柔道は日本だけのスポーツではないことを認識した日本人は少なくないのではないかと思います。オリンピックにおけるメダル獲得総数では日本がまだ首位を守っていますが、第 2 位はフランスです。

フランスで柔道が広まった背景には、一人の日本人指導者による努力と創意工夫がありました。川石造酒之介（みきのすけ）（1899-1969）は兵庫県姫路市に生まれ、アメリカ、ブラジル、イギリスで柔道指導の経験を積んで、1935（昭和 10）年にパリへ来ました。フランスで柔道を広めるために、川石は 2 つの工夫を

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

しました。一つ目は、柔道の技の名前を分かりやすくしたことです。柔道の技の名前は、日本人であっても、柔道をやったことがない人には難しくてわかりにくいものです。技の名前は、日本語をフランス語に訳すのではなく、「足技一号」、「腰技二号」といったように、技を系統化して分かりやすくしました。また、技のかけ方をイラストにして解説を加えて、日本語が分からなくても技を理解できるようにしました。

二つ目は、柔道の帯の色を増やし、進級の目安を示したことです。それまでは主に白と黒の二色が使われていましたが、緑や青などを加えて全部で7色にしました。進級の目安を示すことで、練習の励みにしました。こうした川石の指導法は、「川石メソッド」と呼ばれました。

川石がパリへ来て8年後の1943（昭和18）年5月に、第一回フランス柔道選手権大会が開催されました。しかし、第二次世界大戦の戦況が悪化して、その年の8月には日本への帰国を余儀なくされました。川石は、柔道連盟の設立にも力を入れていました。終戦翌年の1946（昭和21）年、フランス柔道連盟が設立されたことを受けて、フランスのスポーツ省の招へいで、1948（昭和23）年に再度フランスへ渡りました。そして、その後は再び故郷の地を踏むことなく、フランスにおける柔道の普及のために生涯を捧げて、1969（昭和44）年に69歳でこの世を去りました。川石は、フランス柔道の発展に貢献したことから、「フランス柔道の父」と呼ばれています。

2024年夏に開催されるパリ・オリンピック大会では、世界トップクラスのフランスと日本の選手がどのような戦いを見せてくれるのか、今から楽しみにしています。

